

今年は戦後 80 年という節目の年のせいか、映画やドラマ、報道番組や博物館・美術館の展示にも、戦争をテーマにしたものがたくさんありましたが、よく知られた古い作品を改めて見直すことも大切だなと考えさせられた作品がありました。ジブリアニメ『火垂るの墓』です。

私の父は、主人公の清太と同じ年（1931 年生まれ）で、映画公開当時はまだ 50 代、原作者の野坂昭如さんもまだ第一線でご活躍でした。2025 年の今年、私の父も野坂昭如さんも既に亡く、清太や節子が生きていればそれぞれ 94 歳・84 歳です。公開から 40 年経つ作品を、久しぶりに鑑賞して、気づいたことがありました。

神戸空襲で母を亡くした清太と節子が「4 歳と 14 歳で、生きようと思った。（公開当時の広告コピー）」物語。若いころに観たときは、身を寄せた親戚に邪険にされ、明るさを失っていく節子を案じた清太が、母の貯金や自身の生活力（家事力）を元手に「やっていける」と判断して、居心地の悪い家から出たのだと思っていました。でも、改めて観ると、二人を邪険にする「西宮のおばさん」の言動が特に意地悪くもなんともない、当時の「お国のために尽くす」価値観の下に一家の衣食住を切り盛りしていた市井の人の、ごくありふれたものに過ぎないことに気づきました。清太や節子からすれば意地悪に感じるだろうし居たたまれないけれど、「お国のために働くのが優先」「この非常時に（童謡を楽し気に）歌うなんて」等、言う内容は軍国主義で自由が制限され喜怒哀楽の表現も抑圧されていた、当時の世間のあたりまえに過ぎませんでした（二人の周囲の大人はみな冷淡です。余裕がないので親切も関心も続かないのです）。そこで清太が求めたのは、節子が愛らしい 4 歳の子どもとしてそのまま生きられる、清太自身も子どもとしての自由を守れるユートピアだったのではないかと思います。

もちろん、家を出たところで社会全体が軍国主義に覆われているのだから、求めたユートピアはどこにもなく、苛酷な結末に至ります。『火垂るの墓』は、人間が人間らしくいられない、子どもが子どもとして生きられない戦時下の社会を描いた作品だったのだと、あらためて実感しました。

戦後 80 年、記憶の継承ということが盛んに語られましたが、「かつて知ったこと」「知っているつもりのこと」を何度もふりかえり味わい直すこともまた、大切なのだと思います。